

# 人権エピソード



# 佳作

## 大切なもの

あなたの、本当に大切なものは何ですか？ そう聞かれて何を思いますか？

私は、夏休みにたくさんの終戦ドラマを見ました。見て思ったことは、戦争を喜んでいる人は一人もいないということ。必ず、みんなが泣いている。悲しんでいる。どうして戦争なんてするの？ 疑問をもつこともなく、「お国のため・・・」と人々はがんばっていた。でもそのがんばりは何のためなのか。何も、悪いこともしていないのに、罪も何にもない人が戦争によって死んでいく。そして、多くの人悲しみと苦しみを味わう。

あるドラマでは、中学生の弟は日本軍。兄はアメリカ軍。兄弟が敵。原子爆弾ばくだんを落としたアメリカ軍にそんな人がいるのは知ってましたか？ 戦争の勝ち負けとか関係ない。兄弟が敵同士になって苦しんだ人がいる。どう考えても、戦争で喜んでいる人はいないのに人はなぜ、戦争をするのだろう？

人々が泣く理由は、大切な人を失ったから。大好きな家族、仲良しの友達。この時代に生まれてきた人はかわいそう。こんな単純な言葉えんだけど、今私がこうやって鉛筆びつを持ってられるのは、私がこの時代に生まれてこられたからできているのだ。ここで生きていること自体が幸せなことなんだ。

この全世界の最大の罪は”戦争”。これからの社会には、必要ない。でも絶対に、過去を忘れない。私たちが、戦争のないすてきな世の中をつくっていくためにも。

あなたの大切なものはなんですか？

中学1年生 たにくち 谷口 み みな美さん



# 支え合って生きていく

小学校四年生のときに私の大好きなおじいちゃんが<sup>たぞうきふぜん</sup>多臓器不全で亡くなりました。あんまり、おじいちゃんとの思い出はなかったけど、とても悲しかったです。いつもおじいちゃん家に行くとき笑顔でおばあちゃんと迎えてくれたのに、もうおじいちゃんはいないんだなと思うと<sup>つら</sup>辛くなってしまいました。

私がおじいちゃんが死んでしまったことを知った時はまだ小学校にいました。急いで帰りの用意をして家に帰って病院へ行きました。するとおばあちゃんが泣いていました。たった一つの命でこんなにもたくさんの人が悲しむことをその時感じました。

また私は、ずっとかわいがっていたハムスターも失ってしまいました。<sup>ろうすい</sup>老衰でした。異変に気づいてすぐ病院に電話して、連れて行きました。しかし、あと少しで病院に着くところで死んでしまいました。その時その場所にいた家族が泣いていました。でも私はその時泣きませんでした。少しウルツときたけど家族の前では泣けないと思いがまんしました。でもやっぱりがまんできなくて家に帰った後、トイレで大泣きしてしまいました。

それ以来、心の中のどこかがポカーンと<sup>あ</sup>空いたような感じになってしまいました。たった一つの命でもやっぱり悲しむ人がいることを<sup>あらた</sup>改めて、その時実感しました。

この経験から、私は将来医療関係の仕事につきたいと思います。少しでも私のような<sup>いりよう</sup>つらい経験ををする人を減らすためです。体の傷を治すと共に心の傷も<sup>いや</sup>癒していきたいと思います。

そして今、東日本<sup>だいしんさい</sup>大震災でたくさんの命が失われ、たくさんの家族の笑顔が<sup>うば</sup>奪われました。「一つ一つの命を大切にする」という事を考える震災となりました。

「<sup>みな</sup>皆で支え合って生きていく」

それが命の意味だと思っています。





## いのち

私が中学生のとき、曾祖母が亡くなった。私は曾祖母のことが大好きだったが、中学生になって入った部活の忙しさを理由に随分会っていなかった。亡くなる間際入院していた曾祖母にお見舞いに行った時、曾祖母は私の知っている元気な曾祖母ではなかった。病院のベットには言葉もはっきり話せない知らない人が横たわっていた。

ふっくらしていた顔や腕はほっそりとして、まるで骨のようであった。言葉は喃語のようで聞き取れず、話しかけても目は私を捕えていなかった。

私はその時初めて曾祖母の死期がせまっているのを感じた。母がいつも見舞いに行けと言うのを受け流していたが、その時の自分を悔やみ、曾祖母に申し訳ない気持ちでいっぱいだった。母から曾祖母が弱っているのを聞いていたのに、その時初めて後悔したのだ。

その後、まもなくして曾祖母が亡くなった。通夜、葬式のときは曾祖母にもう会えない悲しさでいっぱいだった。生きているときに会わずに自分のことを優先してきたのは、この私だったのに。

亡くなった人とは会いたくてももう会えなくなる。そう気付かせてくれたのは曾祖母だった。今、生きて、会える、大切な人を大切にしなければならない。明日大切な人が亡くなっても後悔しないぐらい大切にしなければいけない。

大切な人を、どんなときも、想って生きてゆきたい。

高校3年生  
うめもり 梅森  
ゆみえ 弓恵さん

時が流れ季節が変わるごとに、わが家のささやかな庭でも花が咲き、主人との二人の暮らしに彩りを添えてくれます。今はサルズベリやひまわりなど、夏の花がその時が来るのをそっと待っています。

花が大好きだった母の墓前に、今度はどの花を摘んで行きましょうか。晩年、病气や怪我の為入退院を繰り返した母。夫を看取り、娘さんを48歳の若さで亡くし、自身の体も弱り、心は幼女ようになっていく中で、いつも花を愛でていました。車いすですで病院の中庭を散歩する時など、「あれ、摘んで帰ろ」と手を伸ばすのを、「今度持つてくるから我慢して」と止めたこともありました。私の夫である自分の息子に、「どなたか存じませんが、やさしいお方、今日は散歩に連れて行って来てくれてありがとう」と、頭を下げて病室の外まで見送りに出てきた時の、主人の寂しげな笑顔と母の無邪気な笑顔が忘れられません。

明治生まれの母は、働くのがあまり好きでない夫と6人の子どものために、働きに働いてきたそうです。末っ子の主人と結婚した時には既に70歳に近くなっていましたが、まだ元気で仕事に出ていました。

その後、大腿部を骨折して寝たきりになるでしょうと診断されても、杖をつきながら自分の足で歩き、癌で絶望視されても、回復して皆を驚かせました。そして数年後、特養ホームに面会に行くたびに、一緒に喫茶店へ行っては好きなコーヒーを飲みながらおしゃべりするのを楽しみにしてくれました。

93歳の冬の夕暮れ、花びらが落ちるように息を引き取りました。私たち、特に孫である子ども達に、生きること死ぬことを教えてくれた母に感謝です。

ききょう  
桔梗さん(54歳)



## 震災を通して感じた命の重み

今年3月に東日本大震災だいしんさいが起きた。ずっとニュースを見ていると町を津波つなみがどんどん飲み込んでいく。まさに衝撃しょうげき的だった。さらに地震じしん、津波などに巻きこまれ1日、2日と時間が経過すると同時にどんどん死者が増えていった。また家族とはぐれてしまい、安否あんびの確認をテレビを通してしたりと今まで見たことないことばかりだった。私はこれまでの人生で一番地震の恐ろしさを感じた気がする。こうして連日報道を見てたら自分が今、特に何の不自由もなく生きていられることの幸せを何回も感じた。今自分が生きていることに喜びこゝろかいを感じて後悔のないよう生きなればと思う。だからよくニュースとかで自殺の話を目にしたら悲しい気持ちになる。また私は会話の中でふざけて「死ぬ」と言い、みんなもおそらく無意識に使ってるが、簡単にそういう言葉を口にしてはいけないと改めて考えるようになった。

将来、近畿地方にほぼ確実に大地震が来るらしく、それがもしかしたら明日にも起こるかもしれない。また地震ではなくてもいつどんなときでも命を落とす可能性がある。家族や友達など愛する人が亡くなったときのショックは本当に大きいと思うし、私自身突然死んでしまう可能性もあるので、1日1日を感謝して大切に生きようと思った。

はっとり だいき  
服部 太樹さん



# 優秀賞

## 「いのち」

私には七十五歳の祖父がいる。七〇歳を過ぎたあたりから、手のふるえ、視力の低下などの症状が見られるようになった。そして、急激にやせ始めた。

祖父の変化に周りは心配し、病院へ行く事をすすめた。しかし、祖父は断固<sup>だんこ</sup>として聞く耳を持たなかった。「もう、年だから死んでもいい」と言って決して病院へ行かなかった。そんな日々が二・三年続いた。周りはあきらめ始めていたが私はあきらめなかった。大好きな祖父に生きていてほしかったからだ。私の説得により祖父は病院へ行く事を決めた。皆、安心した。しかし、祖父の命に危機はせまっていた。今すぐ、大きな病院で手術しないと命が危ないと診断されたのだ。すぐに救急車で大きな病院に運ばれ手術を受けた。祖父の命は助かった。しばらく入院の必要はあるが、退院したら今まで通り生活できるという事だった。

祖父は今まで自分の力で生きてきたとよく言っていた。しかし、それは間違った事だと手術を機に気付くことができた。先は長くないが、今を大切にしたいと手術後、私に話してくれた。そして、「自分だけの命ではなく自分は周りに生かされている。この歳になってやっと気付く事ができた。ありがとう。」という言葉をかけてくれた。私は本当に嬉しかった<sup>うれ</sup>。確かに、祖父のようにどうでも良いと思ってしまう事もあるだろう。しかし、自分を必要としてくれる人もいる。決して、命は軽いものではない。だから、周りの為<sup>ため</sup>、なにより自分の為にしがみついても生きていかなければならない。生きてくても生きる事ができない人もいる。ならば、生きる事ができる私たちが、その人たちの分まで一生懸命生きていかなければならないと私は思う。私たちは周りに生かされているのだから。





## 「いのち」—かけがえのないいのち輝かせて—

十八才の時、心停止になり、あの世に旅立ちかけた息子もどってきて十一年。何も答えてくれず、体を動かすことも出来なくなった息子を見て涙する日々だった。息子は元気でいてくれる事で私を支えてくれ、人との輪を次々と広げてくれた。泣いてばかりの私の話を黙だまってきいてくれた人、知人の少ない私を、そっと気づかせてくれた人、心はそばにいるからねと手紙をくれた友、母、姉妹弟、娘は、淡々と私の話を聞く。どんな状態でも息子の事を、見つづけなくてはと、心を奮ふるいたたせる。今、息子の耳元でポソポソ話のできる幸福、息子からの返事はないが、「お前もグチばかり聞かされて大変ね。」といえる私。頑張がんばらない、だけど継続は力なりと息子に話しかけ続ける。生きることは頑張ることだと東日本大震災で被災された方の言葉が心に残った。息子は頑張じしゅつてくれている。奈良に住んで二十三年、自転車にのって、息子のところに行く前、寺社にお参りに行く。一言観音様には、息子がかえってきますよう様にと通い続け、大仏様には病気にかかりませんようにと守護神の不動明王様には無心いのになって祈り続けた。来年で十二年、この先どんな事がおこるかかわからない。悲しみは去ってはくれないが、大きな病気もせず、意識がなくても、グチを聞いてくれ、頑張じしゅって一日一日を生きてくれている息子に感謝。

N.Yさん(58歳)



私は、44歳の時に胃部検診で再診となり「胃に癌組織があります手術をする事になるでしょう」と告知を受けました。入院までの四日間が「こわかった」怯えました。私は22歳に、母を胃癌で、更に姉を37歳に同じく胃癌で亡くしたのです。あーっ、次は私か、この波は越せない。大切な妻・2人の子供のことが頭をよぎりました。この世を去るであろう「事実」が、恐怖に変わりました。手術で胃は全摘となり、流動物を飲み込んででも口に戻し、体が受けつけず、長期入院となってしまう、ようやく経口栄養剤のたすけで退院し職場復帰が叶いました。しかし4年後に再開腹手術。なんとか退院。そこから死が頭にこびりつき、生きたい心と、死に向う心が揺れ出したのです。深夜の消化液逆流と、食物を持つ右手が震えて箸が持てず、字までが書けない、他人の声、音、生きようとする心さえもが恐怖と化しました。

この頃は、意識の底から「病気が怖い、自分がきえてしまう」と、周囲が白く薄れ逃げ場のない恐怖が胸の中から湧き上がり、死ぬ場所と方法を考えている心と、生きたいと思う心の恐怖の中で、まだ動く左手にペンを持ち「12345」「あいうえお」と文字

を練習する自分がいました。そんな中、医師に「一度心の声を聞いてもらえる診察を受けませんか」と進められ、医師は、私の過去・癌の恐怖・就寝出来ないつらさ・死へと向かわせた言葉を聞いて下さいました。医師の治療を受け、動く左手で毎日日記を書き、いろいろな本が読めるようになり「こころ」に言葉と本が染みこみました。読むでは涙し、日記に温かさを綴る日々を送りました。時間が私に穏やかな波を起こさせ、恐怖心が少しずつ薄れ優しくなった母や姉を思い起こしました。

病気や身の障害で心乱す事もあるでしょう、しかし「生きていられる普通の事です」これからは、日常のささやかな幸せをかみしめて自分と大切な家族の幸を願い生きて行きたい。

